Introduction

取り壊しの決まった公営団地。
まるで巨大なコンクリートの墓標。
オガワはそこの最後の住人。

過去に結婚はした。
が、妻の姿はここにはない。
子供もいない。
早期退職し、いまは働いてもいない。
生活に必要なものはネットで購入している。

最近、オガワはライフログを始めた。
自分にまつわるすべてをデジタルデータ化し、"クラウド"にため込む作業。
自分と向き合うだけの平穏な日々。

だが、予期せぬ来訪者が次々と現れ、平穏は崩れ去る。
そのときオガワの中で覚醒したものは……

クラウド

青山円形劇場　2011.6/23thu–7/3sun

www.suzukatz-cloud.com

鈴木勝秀　構成・演出

田口トモロヲ
オガワ

鈴木浩介
エンドウ

粟根まこと
イタバシ

山岸門人
ウサミ

伊藤ヨタロウ
アマリ

Taguchi Tomorowo

若くして死ねず、敗北に気づきつつ生き延びた男を演じる。

Making of CLOUD

スズカツとは 10 年ぶりの芝居づくり。改めて向き合うと、お互いに年を取ったことを実感しますね。つい「最近、体どう?」みたいな話になるし（笑）。だいたい、この 10 年の間にどちらかが死んでいても、次の誕生日より葬式が近くても何の不思議もないわけで。だから去年、この舞台の話をスズカツからもらったときも、割と即決に近かったんです。彼は「以前から続けているシリーズ作品の最新作をやりたい。直感的に主人公にトモロヲさんが浮かんだ」と言った。しかもフィリップ・K・ディックを底本に、個人的かつ作家の指向性の高い作品をやりたい、と。古いつきあいの 50 を越えた者同士として、ここは積極的に参加したいと思えたんですよね。

始まった稽古場は……男くさくて暑苦しいです（笑）。完全な男芝居だから当り前かも知れないけれど、同時に男子校の文化祭ノリの楽しさもあって、それは 10 年前の現場でも感じた記憶があります。

ディックは 20 代の頃、夢中になって読んだ作家です。当時はこんなパソコンやネットが席巻する世の中になるとは思わず読んでいたけれど、確かに作家としての先見性はスゴイですよね。元祖オタク＆引きこもり人間の普遍性も、しっかりと作品の中に描いていますし。

オガワはそんなディック・ワールドを象徴するような人物。劇中の「働いてません！」って台詞、大人としてどうかと思われると知りつつも僕は大好きです（笑）。

社会や常識など、巨大な外的抑圧との闘いはディック・ワールドでは必然の行為。オガワの哀しさはその闘いで死ねず、敗北に気づきつつ生き延びてしまったことじゃないかな。さらには「自分は本当に闘ってきたのか?」という自問の果て、人生を折り返したあと、彼は改めて闘わざるを得ない状況へと巻き込まれていく。若くして亡くなった人間は神話やアイコンになれるけれど、その可能性が無くなった人間はどう生きていくべきか。残された時間との無謀な闘いとも言えるかな。

それに彼は闘いの中心的人物になりたいわけじゃなく、本当は自分の好きな世界で誰にも邪魔されずただ生きていたいだけ。なのに、彼の意志とは関係なくエンドウやイタバシ、ウサミらがコンタクトを取って来るから、喜びや苦しみのドラマが生まれ、そこにオガワは否応なく引きずり出されてしまう。この作品の中にはそんな「人生」の縮図がある。だから今、葛藤で汚され、味わい深くなる人間と人生を演じる面白みを強く感じているんだと思います。

田口トモロヲ

東京都出身。1978 年「発見の会」で初舞台。アングラ演劇などに出演する傍ら、パンクバンド「ばちかぶり」を結成。89 年の映画『鉄男』(塚本晋也監督) 主演以降、映画を中心に活動。97 年、毎日映画コンクール男優助演賞受賞。NHK『プロジェクトX〜挑戦者たち〜』のナレーションを担当。2003 年『アイデン＆ティティ』で映画監督デビューし、第 2 作『色即ぜねれいしょん』で新藤兼人賞・銀賞を受賞。近年の出演作に舞台 日本総合悲劇協会『ドライブインカリフォルニア』(松尾スズキ作・演出)、『三文オペラ』（宮本亜門演出）、映画『少年メリケンサック』、『GANTZ』、『GANTZ-PERFECT ANSWER-』、『あぜ道のダンディ』など多数。鈴木勝秀演出作品には『SWEET HOME』『ウェアハウス』に出演。10 年余の歳月を経て、表現者としてのその比類なき存在感が Suzukatz. ワールドにどう映えるか、多大なる期待が寄せられる。

Suzuki Kosuke

オガワ＝トモロヲさんから感じるものを積み重ねていくしかない

Making of CLOUD

昨年からここ、青山円形劇場での芝居が続いているんです。しかも作品も、ちょっと変わったテイストのもの。『叔母との旅』は男優４人で 20 数役を演じ分け、場所もどんどん変わっていくロードムービー的な設定でしたし、その前の『NECK』は首だけでの芝居でしたから。そのうえ円形という舞台の形状は、僕ら演じる俳優にとってもお客様にとっても、ある種「安全でない」というか……独特の緊張感がありますよね。僕らはいつも以上に全身をさらすことになるし、お客様も参加型と言うか、ただ観てさえいれば良い状況より一歩踏み込んだ共犯関係にならざるを得ない気がします。

スズカツさんとの芝居づくりもこれで４回目。オリジナルはこの『CLOUD』のルーツとなる『LYNX』を、あとは翻訳劇『ダムショー』とテネシー・ウィリアムズのリーディングをご一緒させて頂きました。

どんな作品のときでも、役を腑に落とすためのまっさらな状態を創ることが僕にはまず必要なんです。それからようやく、演じる人物の背景やベースとなる環境、気持ちの動かし方を丁寧に追いかけていく。役の内面を創ることにに関しては、スズカツさんが非常に丁寧にリードして下さるので、今は信頼してついていくだけですね。

エンドウに関しての現時点でのヒントは……スズカツさんから伺ったジョン・レノンの狂信的なファンに関するエピソードが大きいかな。あるときレノンの自宅の庭に不審者が侵入し、駆けつけた警官に捕まった。その男は「レノンが歌で自分のことを歌っている」と強硬に主張する。いくらレノンが「違う」と言っても聞き入れないんです。なのに、最終的にはその男に対しレノンから「腹が減ってないか？」と言い出し、受け入れて一緒に食事をした、と。

レノンとその男の関係は、確かにオガワとエンドウの相似形ですよね。レノンが男を受け入れた優しさというか、ある種の油断みたいな部分を、後に彼が殺されることに結びつけて考えると、オガワが巻き込まれる状況にも繋がっていきますし。

正直、僕にはエンドウのような発想は理解できないけれど、でもトモロヲさん演じるオガワと向き合い、そこからもらうものが今回はとても大きいと思っているんです。見知らぬものを受け入れる母性にも近い優しさ、その裏側にある孤独をトモロヲさんから感じる。そんな瞬間を、本番までひたすら積み重ねるしかないと思っています。

鈴 木 浩 介

福岡県出身。青年座出身。近年では『橋を渡ったら泣け』（生瀬勝久演出）、『タトゥー』（岡田利規演出）、『ＬＯＶＥ 30 ＶＯＬ．３ ～エアコンな夜』（宮田慶子演出）、『NECK』（河原雅彦演出）、『叔母との旅』（松村武演出）、城山羊の会『メガネ夫妻のイスタンブール旅行記』（山内ケンジ作・演出）などの舞台で存在感を示す。TV ドラマの話題作への出演も多く、特にドラマ・映画の『ライアーゲーム』の「福永ユウジ」役は視聴者に強烈なインパクトを与えた。硬軟自在な演技に加え、作品によっては屈折や狂気をも醸し出す存在感が強い印象を残す若手実力派。鈴木勝秀演出作には『LYNX ～リンクス』『ダム・ショー』に出演。

Awane Macoto

作品世界の基盤に一番近いのは僕かも知れません。

Making of CLOUD

スズカツさんの演出を受けるのは『冬の絵空』に続いて二度目。ほぼ毎日一回は全シーンを当たる稽古のシステムは、役の気持ちをつくる上でも全貌を包括できるので収めどころが見つけやすいと思います。一挙手一投足を決め、一景、二景と場面を細く返しながらつくっていく新感線の芝居づくりとはある意味対極。でも、今のように自由度の高い、俳優から出て来るものを重要視した稽古を外部で経験しておくと、劇団に帰って、いのうえ（ひでのり）の演出に再会したときに、細やかな中でも彼なりに言葉にしない、説明を端折った部分の存在に気づけるな、と思えるようになりました。

「構成・演出」名義のスズカツ・オリジナル作品は初体験ですが、今回の作品世界は僕にとって、かなり入りやすいものです。フィリップ・K・ディックを含む SF 作品は好きで、かなり読んでいますし、何よりコンピューターを用いたネットワークを活用した生活という、作品世界の基盤に一番近いのは僕かも知れません。少人数のカンパニーですが、中にはパソコンも持っていなければテレビも見ないという方がいますからね（笑）。「クラウド」や「キップル」といった単語に最初から説明がいらなかったのも、僕だけじゃないでしょうか。イタバシという役にも、そんな僕の在り様が反映されていると思います。

パソコンは 80 年代、まだマイコンと呼ばれていた頃から文房具の一種のような感覚で使い始めました。本格的、ネットワーク・ツールとして使い始めたのはマックから。火事でひとつだけ持ち出せるなら、今使っているマックブック・プロですね。それがあれば通信も記録も、すべて再構築できる。パソコンとそれによるネットワーク・コンピューティングは、いまや僕の生活にとって「ハブ」（中心にあって様々なものを結束させる機能を持つもの）になっている。振り返ってみると、それくらい僕の生活を劇的に変えたものなんだな、と。

ツイッターもブログもちょっとやったりしていましたが、オガワのように自分を記録するためのツールとしてのネットワーク・コンピューティングに関しては、これまであまり有用だとは思っていませんでした。でも最近ちょっと志向が変わって。週一回書いていたネット・コラムを読み返すと、当時自分が何をしていたかの覚え帳がわりになるうえ、書くことで自分の考えを整理できたり、人に説明することで理解が深まり、物事の別の側面にも気づくというようなこともあると実感したんです。これからはもう少し意識的に、「記録」に取り組んでみようかなと稽古をしながら思ったりもしています。

粟 根 ま こ と

大阪府出身。1985 年『ヒデマロ 2』より劇団☆新感線に参加。劇団の中核を担う俳優であり、コメディからミュージカルまでこなすマルチ・プレイヤーとして評価が高い。人物の観察力が高く、イラストも得意なことから雑誌のコラムなどでもその才能を発揮。近年の出演作に、劇団公演『港町純情オセロ』（いのうえひでのり演出）、舞台『昭和島ウォーカー』（上田誠作・演出）、リリパットアーミーⅡ『罪と、罪なき罪』（わかぎゑふ作・演出）、真心一座身も心も『流れ姉妹〜たつことかつこ 第 1 章』（河原雅彦演出）、劇団鹿殺し『僕を愛ちて。〜燃える湿原と音楽〜』（菜月チョビ演出）、映画『これでいいのだ！！ 映画☆赤塚不二夫』、TV『MM9』など。次回出演作は劇団公演『髑髏城の七人』（11 年 8 〜 10 月 いのうえひでのり演出）。鈴木勝秀演出作品には『冬の絵空』に出演。

Yamagishi Mondo

久々に役についてジックリ考える時間を持っています。

Making of CLOUD

僕が所属している劇団鹿殺しは超肉体系の稽古が主流。でもスズカツさんの稽古は肉体的に過酷ではないけれど、脳内カロリーの消費がすごく高い感じで、僕としてはむしろ疲れる感じがする。劇団では体ばかり動かして、頭を使っていなかったのかもしれません（笑）。

スズカツさんは僕から見ると凄く頭の良い人。僕の考えていることなんかすべてお見通しで、ちょっとしたアドヴァイスを受けるだけで「あ、それもこれもバレてる」と思ってしまいます。でも、『CLOUD』の世界観には少し近いところもあって。鹿殺しの前に所属していたビタミン大使 ABC では、結構 SF 的な設定の作品をやっていたんです。その時の記憶を少し掘り起こしたりはしていますね。とはいえ僕、フィリップ・K・ディックも知らなくて。今、粟根さんから短編集をお借りして「マイノリティ・リポート」の半分くらいまで読んだんですが、観念的で深いというか、今更ながらその面白さに目覚めつつあります。日常的に頭を使って暮らしていると、ディック的な世界にもアンテナが向くのでしょうか。

鹿殺しでは作品によって役に入り込むものと、そうでないものがあるんです。何せ 1 回の舞台で、何役も演じながら 14 回早替えがあるとかいう場合もあって（笑）。そういう時と比べると今回、「ウサミという人間は……」と、考える時間がかなり多い。自発的にだけでなく、スズカツさんからもらうダメ出し、たとえば「そこは台詞なくていいよ」「自分から発信しなくて大丈夫」というような言葉から、その裏側にあるウサミの理由、心の動きや感情について自然と考えるようになっているんです。引き算の芝居というか、足したり飾ったりしないで役を立ち上げていくという普段できない勉強をさせて頂いている感じで、本当、この舞台に出られて良かったです。

事前には「スズカツさんはあまり細かいことはを言わないから、自分から聞きに行くくらいじゃないとダメ」みたいなことを聞いていたんです。でも実際は僕らのやることをすごくよく見たうえで、的確な指示がビシビシ飛んでくる。いや、僕が頭悪いからかも知れないんですけど（笑）、でもその指示のひとつひとつが信じられるから、今は完全にスズカツさんに身を委ねている状態なんです。

今やっていることが身になれば、新しい自分にも会える気がする。最高にカッコ良くて面白い先輩方に揉まれる日々を、とことん楽しもうと思ってます！！

山岸門人

東京都出身。2003 年 5 月、劇団「ビタミン大使 ABC」に所属。Vol.28『ザ・ストーカーズ』以降、06 年 Vol.35『君のビート』（共に宮川賢 作・演出）まで全作品に出演。08 年、劇団「鹿殺し」第 17 回公演『2008 改訂版・百千万』出演を機に、同年 2 月「鹿殺し」に入団。以降、全劇団作品に出演している。俳優活動以外にも、ライブパフォーマンスユニット「劇団鹿殺し RJP」のフロントマンとして、「ダイノジロックフェスティバル」「COMIN' KOBE' 11」などの大型ロックフェスや都内ライブハウスで音楽活動もしている。他には、アニメーション『家庭教師ヒットマン REBORN』（声の出演）など。鈴木勝秀演出作品には初出演となる。キレの良い演技体が Suzukatz. 作品にどんな新風を吹き込むか、要注目のニューフェイス。

Ito Yotaro

身に染み込んだ業、カルマがアマリを演じる武器になる。

Making of CLOUD

『LYNX』の主人公オガワが死なずに年を取っていたら……というところから始まる『CLOUD』。登場人物 5 人の名前も『LYNX』とすべて同じ。僕は『LYNX』再々演でアマリを演じたけれど、元々はスズカツが演じていた役なんです。だからということだけでもないけれど、アマリは他の登場人物たちとは違い、演出家や作家と同じ「神の目線」で主人公オガワに対して働きかけるような面を持っている気がする。演じながら、スズカツのある部分をトレースする感覚もありますしね。

こういう非現実的で、人間より神や悪魔に近いような役は、スズカツ作品に限らず与えられることが多い。それが僕の本質に近いと、色んな人に思われているということなんでしょう(笑)。

ただ今回は、いつもより一段複雑な設定じゃないですか。舞台上に出現するアマリは一人の人間ではない。宅配便のおじさんであるアマリ、オガワとネット上でチェスや対話をするアマリ、そしてラスト近く、それまでの物語とは違う次元に存在するかのように表れて世界を閉じるアマリ。姿は同じでも、中身や存在の在り方が場面によって変わっていく。実在するのか、オガワの想像の産物か、はたまたネット上に存在する人智を超越して命を持った存在か……。

考えようはいくらでもある。でも難しく分析すると身動きが取れなくなってしまうので、楽しみながらも共演者と観客に納得してもらえるよう、アマリを立体化するのが当面のめざすところです。

でも、こうして青山劇場の稽古場で芝居の稽古をしていると、しみじみ「帰って来た!」という感じがするから不思議です。スズカツとは本当に長い付き合いだし、トモロヲも 20 年前から知ってはいるんです、舞台は初共演だけれど。ずっと若い頃、トモロヲとはピンク映画で共演しているんですよね (笑)。思えばのんべんだらりと長く生きてきました。まあ、その長い時間の中で身に染み込んだ「業」、カルマみたいなものが、今回アマリを演じるためには武器になるような気もする。完全な役者モードで演じるより、自分の「素」との中間、パフォーマーとして舞台に立つほうが相応しい役だと思うから。舞台上から客席をねめつけてやる、って感じでね。

それにしても、久々のスズカツ・ワールドは本当に楽しい!! これを機に、スズカツにはどんどんこういうソリッドで男の子感満載の芝居を創って欲しいな。そのためにお客様にも、「もっと観たい!」と応援して欲しいですね。

伊藤ヨタロウ

東京都出身。ミュージシャン、舞台音楽作曲家、音楽プロデューサー、「東流会レーベル」主宰 。1981 年に「メトロファルス」を結成。82 年に Kitchen レコードから 20cmEP「SAKAMOGI SONG」を発表し、レコードデビュー。近年は音楽監督として、コクーン歌舞伎『佐倉義民傳』(串田和美演出)、『欲望という名の電車』(松尾スズキ演出)、『たいこどんどん』(蜷川幸雄演出) などの音楽を手がけた。俳優としては『キレイ』(松尾スズキ作・演出) の他、鈴木勝秀演出作『Thirst』『シープス』『銀龍草』『C.B.』『LYNX ～リンクス～』『ファントム』 などに出演。観客を幻惑しつつ異界へと誘う魔的な存在感で、Suzukatz. 作品のカギを握る数多の役を演じてきた。http://www.metrofarce.com/　http://twitter-com/itoyotaro

Staff

構成・演出	鈴木勝秀
照明	倉本泰史
音響	井上正弘
衣裳	小原敏博
美術	原田 愛
舞台監督	安田美知子
照明助手	佐藤 緑
音響助手	清水麻理子
衣裳助手	小林由香
演出助手	新里哲太郎
舞台監督助手	殿岡紗衣子
照明操作	小原ももこ／菅沼 玲
音響操作	大西美雲
演出部	坂本恵美／渡邊香織／田谷絵里香
大道具	C-COM（桜井俊郎） 美術工房 拓人
装置協力	岸ゴム Tokyo バルーン館 大久保 遼 木村恭子 浅井裕子
宣伝美術・WEB	永瀬祐一
写真	西村 淳
協力	マッシュ シス・カンパニー ヴィレッヂ オフィス鹿 エアー・パワー・サプライ オフィス新音 二村周作アトリエ BAT DESIGN
制作進行	相場未江
制作	大島尚子
企画制作	こどもの城劇場事業本部
主催	財団法人児童育成協会（こどもの城）

文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）

Pamphlet

デザイン：永瀬祐一　舞台写真：加藤 孝　編集：大堀久美子

2011年9月1日発行　禁・無断転載
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-1　青山円形劇場
TEL 03-3797-5678